

論語の解釈と日本人

公益財団法人郷学研究所安岡正篤記念館 理事長
「こども論語塾」 講師



安岡 定子 氏

やすおか さだこ
安岡 定子

聞き手
むらたて いさお
室館 勲
(株式会社 潮流社)
代表取締役社長



——安岡定子先生は「昭和歴代首相の指南役」とも言われた安岡正篤先生のご令孫でいらっしゃるのと同時に、現在は、子ども・大人・企業人向けの「論語」教育の最前線で活躍でいらつしゃいます。二〇二一年は渋沢栄一とともに論語が再び脚光を浴びた年でもありましたね。

安岡 「論語」の成立は、約二千四百年ほど前と言われています。約二千五百年前に孔子が亡くなってから、孔子の言行を弟子たちが

約百年かけてまとめ上げ、今の論語の原型が作られました。孔子が未来の人たちに伝えたわけではなく、目の前の弟子たちに伝えた教えが、弟子たちの手によってまとめられ、今も残されているということです。論語に限らず、古典の言葉は原理・原則しか述べていないので、いつの時代も通用します。自分の成長に合わせて受け取り方が変わっていくので、いつ読んでも新たな気づきを与えてくれます。

論語などの思想の存在感は、社会の動きと連動すると言われています。社会が順風満帆でいるときよりも、現代のように混乱、低迷している時に注目されやすいようです。

—— 渋沢栄一氏の「論語と算盤」の反響は大きかったですか。

安岡 はい。経済の低迷に相まって、社会がコロナ禍に陥りました。様々考えざるを得ない状況で、ビジネスマンを中心に渋沢栄一氏

による解釈を入り口として論語に入ってきた方が多かったです。いきなり論語の原文のみではハードルが高いので、渋沢栄一氏がどのように論語を読んで解釈をしたのか、という切り口で私も解説をしています。

——安岡定子先生のお生まれはどちらですか。

安岡 私は東京・文京区生まれです。祖父・安岡正篤と一緒に住んでいました。祖父は明治三十一年、大阪に生まれました。旧制第一高校に進学する際、上京します。上京の際、身元保証人として紹介いただいたのが安岡家です。その後、ひとり娘だった私の祖母と結婚しました。祖父は大家族主義だったので、我々孫も含めて、大人数で一緒に生活していました。祖父は、私には厳しいことを言うわけでもなく、難しいことを言うわけでもありませんでした。穏やかなおじいちゃんという印象が強かった

です。

——安岡定子先生ご自身はどういった歩みをされましたか。

安岡 高校時代から国語の教員になりたかったこともあり、大学進学を考えた際には国語や漢文の方向に進みたいという想いがありました。すると祖父が「それなら二松学舎大学しかない」と、私の人生で唯一、アドバイスしてくれました。当時、漢学に最も精通している素晴らしい先生方が揃っているのが二松学舎大学とのことでした。二松学舎大学は、小規模な大学でアットホームな雰囲気ながらも厳しく指導していただき、その時の基礎があったからこそ、後に論語の学びにも活きたと思っっています。

卒業後は縁あって実家の近くに嫁いで、二人の子どもにも恵まれました。子どもが小学校に入って手が離れたタイミングでもう一回、

生は常に前向きで、弱気な私の背中を押してくださいさる存在でした。先生が学術的な後ろ盾になってくださることで多くのことに挑戦できました。三年前、九十歳でお亡くなりになりましたが、田部井先生に出会わなければ、今の私は無いと思います。

——自分で学ぶところから、子どもたちに教えるに至ったのはどのような経緯がありましたか。

安岡 田部井先生の講座を受講しているうちに、ある時、一緒に学んでいた経営者の方と田部井先生とで、若い人たちに向けた論語塾「こども論語塾」を作ろうという話になりました。私もスタッフの一人として関わるつもりでしたが「若い人に教えるなら女性の方がいいでしょう」と私が講師をすることになりました。「人前に出て実践しなければ成長しませんよ」と田部井先生に励まされて、そこ

勉強し直したいという思いに至ります。そこで選んだのが論語でした。

——様々な選択肢がある中で、論語を選ばれたのはどういった理由でしたか。

安岡 もともと漢詩が好きだったのもあり、学び直しの際はもう一度、漢文や漢籍に触れたいと思っていました。文京区の区民大学というカリキュラムの中に論語講座があり、軽い気持ちで選んだのがきっかけです。その時は当然、こども論語塾の講師になるなどとは思っていませんでした。

そこでは後々までお世話になる田部井文雄先生の論語の講座を受講しました。三ヶ月の短期集中講座で、これが大変面白くて夢中になりました。田部井先生の授業は大学時代の古典とは全く違っていました。その面白さや楽しさに驚いて、それから田部井先生の講座には可能な限り全て出席しました。田部井先

から私の講師人生が始まったんですね。今から十八年前に、子どもを対象とした「こども論語塾」が始まりました。始めてみると、お子さんの一つ一つの反応がみずみずしく素直で。こんな純粹なお子さんたちに、古典の素晴らしさを伝えることは幸せなことだと思いました。そんな気持ちから継続していること、次第に心が固まりました。

——長きにわたって続けていることは素晴らしいですね。

安岡 開講して十年経ったときに、田部井先生から「十年、よくがんばりましたね。しかし二十年続けないと、世の中は変わりませんよ」と言われました。二十年経ったら教え子も親になるかもしれない。親子で論語を学ぶことで、世代間で紡がれる物がある。だから二十年継続すると、社会に変化が見えるようになりますよとおっしゃっていました。



や企業をり
タイアした
人が、地元
で寺子屋を
開いている
場合が多か
つたです。
そのような
方々は仕事

今となつては、小さいころ通ってくれてい
たお子さんが、成長して大学を卒業して就職
する。そういった子たちがいま、学びを活か
しながらも私を手伝ってくれています。彼ら
がまた次の代の子どもたちを育てていくと思
うとワクワクします。

——子どもたちに対して論語を教えるのは難
しい部分もあると思います。

安岡 子どもが授業を面白くないと感じたら、
次は来ないでしょう。子どもがまた行きたい
など興味を持ってもらえるようなクラス運営
に注力しました。ですから当然、内容は子ど
も向けにわかりやすい言葉で伝えることにな
ります。漢籍や古典として論語を扱っている
他の先生方からすると、浅薄に見えたことも
あったかもしれません。「解説が簡単すぎま
せんか」と言われたこともあります。言葉は
伝える相手に理解できる形に噛み砕いて伝え

して、私はあくまで論語という古典の入り口
まで案内する案内人、本人が入り口が気に入
ればさらに深く学びます。本も講座もたくさ
んあります。ですから私は、論語という先人
の知恵を皆さんに通訳して伝えながら、案内
役として入り口まで案内する、という役割と
自負しています。

——苦しかったことはありませんか。

元教師の方
や企業をり
タイアした
人が、地元
で寺子屋を
開いている
場合が多か
つたです。

なければ伝わらないものです。子どもたちに
論語が好きになってもらえるように努力して
きました。

最初は子ども向けの教室でしたが、父兄の
方からの要望で大人向けの論語塾が開講。そ
してその後、企業人の方の要望でビジネスマ
ン向けも開講。と目の前のことに全力投球で
やってきたらそこから枝分かれして、徐々に
拡大していき、今では都内だけではなく、日
本全国合わせると二十箇所以上に広がりました。
古典である論語というツールの良いところ
は、子どもでも大人でも同じ原本を読める
ことです。それを読む人がどのように受けた
めるかに差があります。これは数学などの
教科ではできない教育ですね。

私の役割は、「通訳」と「案内人」だと思
っています。古典の難しい言葉を、現代のわ
かり易い言葉に変えて伝えるという通訳。そ
ではなくボランティアでした。私が思うのは、
職業として成り立たないと、後継者も育てら
れずに途絶えてしまうことです。私は
論語の講師を職業として成り立たせなかった。
「論語を教えるのにお金を取るんですか」と
言われたこともあります。無料で教えるもの
だと根付いていたのかもしれませんが。しか
し受講料や講師をいただくことの責任と充実
した内容を提供する、という信念を貫きまし
た。地域の子たちに無償で教えたいというこ
とも尊いと思います。ただ、次の世代でも安
定して活動するためにも、対価をいただく文
化を確立しなければ途絶えてしまうと思っ
ています。

——次世代のリーダーに向けて、論語の一節
をご紹介します。

安岡 「君子は義に喩り、小人は利に喩る」。
これは渋沢栄一氏をはじめ経営者に好まれて



います。物事の判断基準において、君子は「何が正しいか」で判断して、小人は「どれが一番得なのか」で

判断するという意味です。洪沢栄一氏は物事にあたって「公益性」も加えて判断したと言います。まず「義に則っているか」、二つ目に「公益性に資するか」、最後に「自分にも利益があるか」と考え、この順番は変えなかつたそうです。そして自分の利益にならなくても、正義と公益性に適っていれば行動したと言っています。するとその姿勢を多くの人が支持してくれるので、また協力が集まりやす。それが積み重なれば、自分の利益にもな

つていくのです。

また論語の解釈全般に言えることですが、孔子の言葉を「かくあるべし」と捉えるとしても堅苦しくなります。孔子が言っているのは「人間は誰にでもたくさんの欲がある。心の中はどうあっても良い。表面に現れた行為は律しなさい」ということです。言葉だけを見ると孔子が聖人君子のように見られますが、それでは「孔子はすごいけど、僕はできない」で終わってしまう。実際の経営では「義」と「利」のバランスをとるのは本当に難しいことです。例えば会社が苦しい時期にあつて、今度の取引が大きな利益を生み、従業員の給料が支払える。でも今までの取引先に不義理してしまう。といった状況もあると思います。そこでもし会社の利益を優先したらダメなのかというとそうではない。孔子は「それはダメ」ではなくて「次に同じ状況に

ならないように、そして同じ状況になつたときに義を優先できるような経営を心がける戒めにするのが大事だ」と言っています。つまり理想どおりに出来なければ駄目ではなく、次にそうならないように注意することです。

こうした理解の幅を持てば、論語は幅広く豊かになります。固い学問として学んでしまつたら経営者や実業家が活かしづらい教訓になります。そうではありません。論語の源流は、孔子から弟子へのアドバイスです。机に向かつて練り上げた学問ではありません。

現代は、コーポレートガバナンスを始め、どんなルールも非常に細かく規定して縛っており、その弊害も現れています。そしてグローバルで戦う際には「世界に合わせる」¹¹「日本基準を捨てる」ように考えがちですが、そうではないと思います。日本には日本の良さがあつて、それを活かしながら世界で戦え

——本日は誠にありがとうございます。

■やすおか・さだこ■

一九六〇年 東京都生まれ。二松学舎大学文学部中国文学科卒業。

安岡正篤の次男・正泰の長女。現在、「斯文会・湯島聖堂こども論語塾」などの都内の講座以外にも、宮崎県都市、茨城県水戸市、京都府京都市など、全国各地で定例講座は二十講座以上に及び、幼い子どもたちやその保護者に「論語」を講義している。また企業やビジネスパーソン向けのセミナーや講演活動も行っている。著書に『洪沢栄一と安岡正篤で読み解く論語』（プレジデント社）などがある。